

巻頭言

今回、本誌47巻1号に続いて、「医療イノベーションと健康長寿社会」と題する座談会を開催した。東京大学医学部同級生の座談会として、前回は石井威望先生、高久史麿先生と栗原の三名で「デジタルヘルス」をテーマに語り合った。今回新たに同級生の坂本二哉先生に参加いただき、前年から私が「百歳の心臓」というテーマをあたためていたのに応えてくださり、ご自身の心臓生理学の最新の成果をご披露くださった。坂本先生は心音図、超音波検査に関する世界的権威であるが、もう一人の同級生、渥美和彦先生は、石井先生との協働による人工心臓の開発者として、その黎明期に、人工心臓を移植したヤギの生存期間の世界記録を達成している。残念なことに渥美先生は本企画に賛同いただきつつも昨年末にご逝去されたが、今回、医師として専門性を備えつつ夫人として氏を支え続けた渥美英子先生にも座談会にご参加いただくことができた。

そして後半では、東京大学医学部に続き工学部を卒業された石井先生の「孫弟子」にあたる人で、工学部出身で東大近隣に「がんゲノム医療」のベンチャー企業を立ち上げ文部科学大臣賞を受賞された西村邦裕先生にお話しいただいた。

この座談会は、当初私が同窓生を対象とした「コホート研究」をできないだろうかと思案したことから、昨年に至る三年間に順次クラス会幹事を務めていた三者で語り合う機会を設けたのがきっかけであった。前回、三人だけでもウェアラブルデバイスを使って、医師でもある患者・市民が主導する医学研究を実現できるのではないかという夢が膨らんだ。それを今回の座談会に引き継いだわけだが、座談会の直前に新型コロナウイルス感染症が発生し、1月中にこの会合を持てたことは、今思えば奇跡的であった。1月末に世界保健機関（WHO）が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を宣言し、事態は一層深刻化し、4月から5月にかけて日本における緊急事態宣言下にこの原稿が準備され、8月末から9月初旬にかけて校閲・最終化に至った。

この過程で、坂本先生は、協働研究者である東北大学の田中元直先生を筆頭とする論文が、日本超音波医学会最優秀論文賞を受賞されたという報せが届いた。座談会当時、坂本先生はご自身の成果は従来の心臓生理学を崩壊させるような「コペルニクスの転回」なので、論文が受理されないと嘆かれていたので、一同にとってよるこばしい報せであった。

コロナ禍を体験して、私たちの社会は様々な意味で変容せざるを得ない。我々の世代が模索し、切り拓いてきたものが、この混迷する状況を乗り越えて到達する、新しい時代への架け橋となることを願っている。

栗原 雅直
「臨床評価」編集長